Ⅳ－62　まちづくりに配慮した歩道整備事業（能代幅広歩道）

建設省　能代国道維持出張所　　嶋津　君雄

1. はじめに

活き活きとした「まちづくり」の出発点は、自分たちの住んでいる地域のアイデンティティの確認にあるという。自分たちが住んでいる街を大切だと思うこと、ここに住んでいて良かったと市民がその街に「誇り」を持つことが「まちづくり」の基本にあるといえよう。

人口の急激な減少と高齢化、経済の低迷、長年続いた七夕祭りの中止など、閉塞感漂う地方都市を物心両面から活性化するため、歩道の整備事業においてＰＩ方式の活用や、アカウンタビリティの実践に努め、事業のプロセスに市民を参加させることにより、市民としての主体性と「誇り」の醸成を図り、住民と行政の協働により個性的で「誇り」の持てる「まちづくり」に挑んだ経過を報告する。

2. 事業の概要

工事区間は秋田県能代市の南端を通過する一般国道７号の能代バイパスで、交通量が２万台あり地理的にも交通量的にも能代の玄関となる位置で、店舗や住宅街が増えていて、通勤、通学、買い物客などの多い約１㎞区間である。現幅員２ｍの歩道を３ｍに拡幅したりバリアフリー化などが工事の本来の目的だった。

3.「まちづくり」をめぐる現状

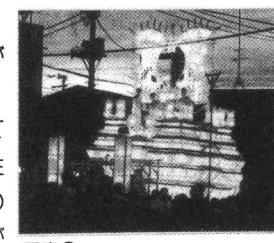
①、対象区間の能代市は急激な人口の減少と高齢化、地場産業である木材の製材業の低迷、永い歴史を持つ七夕祭り（ねぶながし）の中止があり経済的にも精神的にも閉塞感があった。（写真①）

②、市内には全国に誇れるものがありながら、これを地域おこしへつなげようという熱意があまり感じられない街であった。

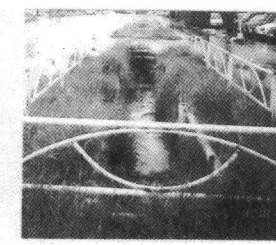
③、国道は特別に景観を考慮した構造になっておらず、街の玄関にあたる処としては地域性や特色があまり感じられなかった。（写真②）

④、緑地帯があまりにも広すぎるため、市民が花を植えたり掃除などの世話をしようという意欲が湧きにくかった。

⑤、行政と住民とのコミュニケーションが無く、市民は工事に無関心だった。



写真①
1300年の歴史のある七夕の「ねぶながし」。平成10年は中止になった。



写真②
着工前の状況。景観の配慮がほとんど無く、地域性も無かった。

4. 地域の個性を演出する

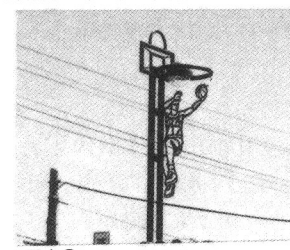
「まちづくり」には自分たちが住んでいる街や文化に「誇り」を持つことが重要である。市民に「誇り」を醸成させるために、この地域の「誇り」を道路付属施設に演出させた。このことにより街の個性のＰＲにもなり物心両面で地域の活性化が進行することを期待し、その具体策として次のように実施した。

①、道路照明灯は「バスケット王国能代」をアピールするデザインとした。（写真③）

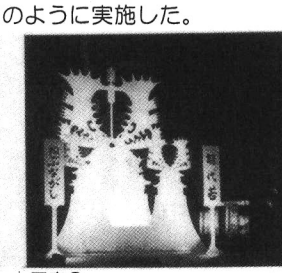
②、日本一の広さを誇る「風の松原」をアピールするため、黒松の並木を形成させた。

③、かつて東洋一の「木材の街」を彷彿させるため木製のフラワーポットを設置した。

④、市民の最大の誇りである能代七夕「ねぶながし」のモニュメントを設置し、ライトアップを行った。（写真④）



写真③
照明灯はバスケットボードをデザインし、一部にはレリーフを取り付けた。



写真④
ライトアップされたモニュメント。能代の「誇り」のシンボルである。

⑤、モニュメントや照明灯の完成時には点灯式や除幕式などのセレモニーを企画し、マスコミを通じて知名度の向上を図った。

5. 市民と協働での「まちづくり」を促す

今までこの街の「まちづくり」はほとんど行政が行っていたことから、市民の「まちづくり」への関心は薄かった。「まちづくり」は市民のためのものであり、「まちづくり」の推進には市民のエネルギーが必要である。歩道工事を契機に市民と行政の協働による「まちづくり」へ発展させることを目的とし、市民の主体性を醸成させるために下記の工夫をした。

①、花壇の世話を住民が参加しやすくするための構造を考え、適当な大きさのフラワーポットを設置した。

②、ＰＩ方式を採用し、アカウンタビリティの実践をした。歩道の設計に市民へ発言権とそれに伴う責任を与えるように図った。このため新聞と市の広報やチラシなどで、歩道の構造や景観についての要望、意見を募集し、検討結果なども新聞やチラシで逐次市民へ情報提供をし透明性を確保した。

③、黒松の剪定などの管理を住民に開放した。

④、工事用のチラシ、新聞、広報などを活用しこの計画のコンセプトや情報を流し、事業の透明性と　コミュニケーションの確保を図った。

6. 市民の反応

①、工事に反対したり、苦情がなかった。

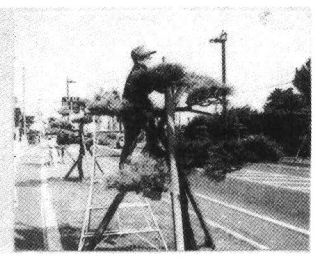
②、沿線の住民からチューリップの球根を緑地帯に植えたいとの申し入れもあり住民は工事に協力的だった。

③、１９０個の木製のフラワーポットすべてに市民が自腹で花を植え、世話をしてくれ県の花壇コンクールでも表彰された。（写真⑤）

④、この工事以降、市民が「まちづくり」を考える兆しが新聞で見かけられた。

⑤、植樹帯に植えた並木の黒松を市民がボランティアで剪定してくれ、歩道のゴミも沿線住民や歩行者が拾ってくれるようになった。（写真⑥）

写真⑤
木製のフラワーポット。多くの市民の善意が見事な花を咲かせてくれた。



写真⑥
街路樹の黒松の剪定も市民がしてくれるようになった。近くには国内最大規模の「風の松原」がある。

7. 教訓

①、新聞記事で市民全体を対象にして意見を募るＰＩ方式を採用したことにより、できた歩道が沿線住民だけのものではなく、市民共有の施設だという認識が市民に生まれたようである。

②、ＰＩ方式やアカウンタビリティはそれ自体が目的ではなく、住民と行政が協働で進める「まちづくり」のためのひとつの手段として考えれば有効であることがわかった。

③、市民の中には、「まちづくり」に貢献したいと思っていても、行動の手段がなく社会貢献できない人が意外に多いことが分かり、道路づくりを通じて市民に社会参加の道を開くことの重要性を認識した。

8. さいごに

１９０個の木製のフラワーポットに植えられた花は、市民がそれぞれ用意したものなのでさまざまな種類があり面白い。中には野菜畑から捕ってきたような貧弱な野花もある。しかし、今この街にいちばん必要なことは、市民の一人ひとりが街の活性化のために何かをやろうという「やる気」を持ち、たとえ貧弱な花でもいいから「まちづくり」の実践として花壇に花を植えることであろう。

苦境に喘ぐ地方都市を歩道工事を機会に、少しでも物心両面から街を活性化させようと私たちは画策した。快適性と安全性をめざした歩道工事を、地域活性化と市民の意識改革へ結びつけようとした出張所としては壮大すぎる構想だったが、花の植えられたフラワーポットの数だけ、剪定された黒松の数だけ、市民の意識改革が確かに進んだと思っている。